第五回ふくふく童話大賞「大賞」

かたっぽの心

涼子の飼う六匹のロボロフスキーハムスターたちは、毎週水曜日に、家族のみんなが寝静まった後こっそり飼育ケージを抜け出し、集会を開くのです。そんな集会があるなんてもちろん涼子も知りません。それぞれが、ほお袋いっぱいに好物を持ち寄ってはポリポリ食べながら、やれ、いついつは自分だけヒマワリの種が少なかったとか、昨日は涼ちゃん元気がなかったようだが、何かあったのだろうかなどと、夜が明けるまでとりとめなく話しあっているのでした。

「…もし俺たちが自然のなかで生きていかなきゃならなくなったとするだろ？草原には俺たちを狙うキツネやヘビのやつらがうようよだ。そう、あわれ、片足ボルシチは、まっ先にあいつらの餌になっちまうのさ。涼ちゃんに感謝しなくちゃな。なっ、ボルシチ。」意地悪そうに笑いながら、ナピートクがボルシチをこづいています。今夜もロボロフスキーハムスターたちの集会が開かれていました。

六匹の中で体の一番大きなナピートクは、なにかにつけて、片足のボルシチをいじめました。他のロボロフスキーハムスターたちもそれを快く思ってはいませんでしたが、ナピート

クが怖いので誰も注意できませんでした。
実は、ボルシチは生まれて間もない、やっと目が開いたばかりの頃、ハムスターフードを狙って涼子の部屋をうろつくようになったドブネズミに、飼育ケージのオリ越しに片足を食いちぎられてしまったのです。
「それはそうと、ドブネズミのやつ、なんとかならないかなぁ。」
「涼ちゃんがてんぷらの切れっぱしをしかけたネズミ捕り器にも捕まらないしなぁ。」
ボルシチを気の毒に思った他のロボロフスキーハムスターた

ちは、話題を元に戻しました。ここのところ、集会はドブネズミの話で持ちきりなのです。

全くドブネズミときたら、ハムスターフードを食い荒すばかりか、下水道からノミやダニ、バイ菌を持込んだりする、本当に厄介なネズミなのです。おまけに性質も大変荒く、ロボロフスキーハムスターたちと友達になろうなんて、これっぽっちも思っていません。それどころか、スキあらば、ロボロフスキーハムスターたちを殺して食べてしまおうとたくらんでいるのです。どうにかしてドブネズミを退治できないものだろうか、みんなして知恵を絞っているのですが、なかな

かいい考えが浮かびません。やがて夜が明け、その日の集会はおひらきになりました。

ある日、大変な事故が起こりました。涼子がうっかり手を滑らせた拍子に、飼育ケージの、上下に開閉する仕組みの金属製の扉がすごい勢いで落下し、ナピートクが左腕をはさんでしまったのです。

その扉は、人間なら二本の指でつまみ上げられるほどの重さですが、体の小さなロボロフスキーハムスターには相当な重さです。

「ギッ、ギギギギッ！」

いきなり左腕をおそった激痛に、ナピートクは甲高い声で泣き叫びました。
涼子は顔色が真っ青です。
「ごめん、ごめんね、ナピートク」
ナピートクを移動用のケースに移すが早いか涼子は泣きべそをかきながら動物病　　ぎました。
「ああ、これは　れてしまってますね。…ナピートクちゃんもシ　ックを　けているだろうし、二、　日はそっとしておいてあげてください。」
　の先生はナピートクの　を　えると、涼子を　めるよ

うに、　に　はないこと、また、ロボロフスキーハムスターのような小さな動物には　が　で、手　は　しいことなどをやさしく　明してくださいました。

「まだ痛　？ナピートク。　トに、　トにごめんね。」

ナピートクは移動用ケースのすみにじっとう　くまったままです。真っ　な　日を　にしながら、涼子は家に　かってと　き　めました。

いく日かたち、ナピートクの左腕の痛みはほとんど　くなりました。しかし、当のナピートクはふさぎっぱなしです。少し　がってしまった左腕は思うように動いてくれ　、　自

なままでした。
水曜日の集会にも　く気がしませんでした。しかし、先週もケ　の　いが悪かったため　できなかったので、をかねて、今週こそ　しなければなりません。ナピートクは重い　をあげ、涼子の部屋の　の集会　出かけました。
「…いい気　だよ。ナピートクのやつ。いつもボルシチをいじめてたバチがあたったんだよ。」
「そんなこと　っちゃ悪いよ。　自　で　い思いしてるだろうし、みんなで　ましてあげなきゃ。」
「おまえがかばうことない　、ボルシチ。だいたいあいつ、

いばってたしなぁ。」

したナピートクは、集会　くの涼子の　ド　ルの で、みんなが自分の　をたたくのを　いてしまいました。悪　を　われるのも　いことでしたが、かばってくれるのが、いつもひどいことを　ったりこづいたりしていじめていた片足のボルシチなのが、ナピートクにとって一番　いことでした。

いっそ、みんなのようにひどくののしってくれた　が、どんなに気が　だったことでし　う。「集会に出ないでこのま　ろう」とナピートクが思ったその　でした。

「ドッ、ドブネズミだぁ！」　然、集会　ドブネズミが
れたのです。
いつもは集会　ではなく、ハムスターフードの　されて
いる　の　りをうろつき回っていたのに、さてはハムスター
フードの　に　きて、今夜あたり、ロボロフスキーハムスタ
ーたちを殺して食べてやろうと狙っていたのかもしれません。
ボルシチたち五匹がいっせいにバ　バ　の　げだし
たので、ドブネズミはどのロボロフスキーハムスターを　い
かけようか一　いました。しかし、涼子の　ド　ルの
にめ　とくナピートクを　つけると、ドブネズミは一　に

こちらに　かってきました。
ナピートクも　てて　げだしました。しかし　自　な左手
では、いつもとだい　手が　います。それでも左　ね、
に　回しドブネズミの　をかわそうと　でした。
ところが、く　かごの　を左　めに　け抜けたナピートク
は、やにわに　上下を　な金　でおおわれ、　く手を
まれてしまいました。そう、　中に　る　り、涼子のしかけ
たネズミ捕り器の中に　げ込んでしまったのです。ネズミ捕
り器から出ようとナピートクが後ろを　り　ると、そこには
いついてふうふう　を　ませたドブネズミが　ちかまえて

いました。　体　　です。
ナピートクの足が　意に　えだしました。
「食われちまう　　」　怖のあまり、　チ　チと　の　が
いません。
ナピートクは金　にしがみつき、なかばあきらめの気持ちに
なってしまいました。
「ナピートク！」
ネズミ捕り器の金　を　　から　器用によじ　り、ナピート
クの　気なつ　やきをかき　すかのように叫んだのはボルシ
チでした。

「ナピートク、　は上の　め金をひっぱるから、　はてんぷらの切れっぱしが　らさがってる部分を、　こう　思いっきりけっとばしてくれ。ネズミ捕り器のしかけを　動させるんだ。」

ドブネズミは　をととのえ、こちらに　っくりと　づいてきます。ナピートクとの　が、ジリジリ　まってきました。

「いいかい、チ　スは一回こっきり、とびかかってきたツの　がネズミ捕り器に　ったその　間だ。…いち、にの…」

ドブネズミが真っ　な　を開き、　い　で　然とナピート

クに　いかかりました。
「さん！」
ボルシチが　め金を　そうと　に金　をひっぱり、ナピートクも　われるまま、ネズミ捕り器のワナの部分に　らさがったてんぷらの切れっぱしを、　まかせにけっとばしました。するとだし　けに　め金が　れ、ネズミ捕り器のしかけが動し、　なバネじかけの扉がいきおいよくふりおろされました。
「　シ　ッ」というものすごい　とともに金属　でできた扉がドブネズミの　っこをとらえます。　さえつけられたド

ブネズミは「ギギッ」と　い声で一　うめき、それっきり動かなくなってしまいました。バネの　が　く、よほど　に　きつけられたのでし　う。ドブネズミは扉にはさまれたまま、気を　っていました。　は大　でした。

ナピートクが金　ごしに　の　を　やると　はしらじらと明るくなってきていました。ネズミ捕り器の扉にはさまれ、気を　っているとはいえ、ドブネズミの顔が目の　にあるのはあまりいい気持ちがしませんが、　ろしかった夜も、もう明けようとしています。

ナピートクもボルシチも、　と　れのため、　ったりで

した。
「ボルシチ…。」明るくなってきた　の　を　んやり　上げながら、ネズミ捕り器の中からナピートクが、ぽつ、ぽつとひとりごとのようにはなしはじめました。
「その、あの、なんていうか…。ありがとうそれでその…ごめんな今まで。ボルシチは足がかたっぽだけど、俺はこころがかたっぽだったんだな。…一番　自　で　いのは、足や腕がかたっぽなことなんかじゃなく、こころがかたっぽなことだったんだよな。」
ナピートクは「ふう」とひとつ、小さなため　をつきまし

た。もうす　涼子が目を　ます　間です。静まり　った部屋
の中を　　の　がこちこちと、　　しく　いていました